

鳴るたびに秋の風鈴とぞ思ふ

藤田湘子

「秋の風鈴」と聞けば、俳人なら否応なく飯田蛇笏の「くろがねの秋の風鈴鳴りにけり」を連想するだろう。蛇笏が往年市で非常に良い音のする風鈴を購めてきて、山廬の書斎の外に吊るしていた鉄の風鈴を詠んだ一句である。

私は実物を見ていないので鉄の鍛造か鑄造か、その大ききさはつきりしないが、日本刀の原料のような砂鉄や玉鋼を用いた澄んだ音色の風鈴だったと推測される。

湘子は「鳴るたびに」とことわる。「ああもう秋なのだ」と。風鈴の音は音として、音と音の間、すなわち、無音の時空間の広がり。それこそが、俳句によつて描かれた形而上の詩的連想の世界に他ならない。

1986年 (558.09.11作) 第六句集『一個』 鑑賞・轍郁摩